

令和 3 年 8 月 20 日現在

機関番号：35416

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2020

課題番号：17K04903

研究課題名（和文）共生・人の多様性理解を深めるカリキュラム開発-教員養成課程家政教育での活用-

研究課題名（英文）Symbiosis and Diversity Understanding Curriculum Development : Utilization in the Course of Home Economics Teacher Training

研究代表者

富田 道子 (TOMITA, MICHIKO)

広島都市学園大学・子ども教育学部・教授（移行）

研究者番号：10738785

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：共生・人の多様性への理解を深めるための『家庭科ユニバーサルデザイン学習手引書』は、実践研究を重ねる中で、教員をめざす学生、中学・高校生、現職教員、一般市民に活用できるものへと改訂することができた。さらに、頻発している自然災害対策として、UD視点を育成した上での発展的授業（減災授業）も提案した。実践結果から、学習者は視野を広げ、多様な人々の生活を想像・思考し、さりげない配慮のある避難所をデザインすることができた。本手引書には、研究者らの専門分野に加え、社会福祉学、特別支援教育、防災学等の研究者や、企業、非営利民間団体、行政機関の助言も取り入れた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本成果には2つの特徴がある。1つは、ユニバーサルデザインを「特別なニーズを持つ人を支援するためのデザイン」という狭義の理解に留めることなく、「自分も含めた多様な人々が社会生活を送りやすくするための製品、施設、情報・サービス、制度等のデザインのこと、その人の自立や自由をより可能にするもの」という広義の捉え方を提示できた点にある。これにより、学習者の共生・多様性視点を育てることができた。2つ目は、避難所における災害関連死の多さと、避難所閉鎖までの期間の長期化に着目した点にある。減災授業は、避難所の機能を見直し、学習者の主権者意識を育てる契機になることも明らかにすることができた。

研究成果の概要（英文）：Manual on Teaching Home Economics Universal Design intended to deepen understanding of symbiosis and diversity of people has been revised through repeated practical studies in order to be used to teach students aiming to become teachers, junior high school and high school students, incumbent teachers and general citizens. Additionally, the manual has proposed more advanced teaching as a measure against frequent natural disasters for those who have nurtured perspectives of the UD. The practice results show that the learners broadened their horizons, imagined and pondered various lives of diverse people and were eventually able to design shelters with thoughtfulness.

As well as researchers' expertise, the manual has adopted advices offered by specialists in social welfare, special needs education, disaster prevention studies and so on. Suggestions made by companies, private non-profit organizations and administrative organs have been also taken into consideration.

研究分野：家庭科教育学 家政学（生活経営学）

キーワード：ユニバーサルデザイン 共生社会 多様性 マイノリティ 減災 持続可能性

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1)1995 年以降、人権教育は国際社会が協力して進めるべき基本的課題とされ、さらに日本は個々人の多様性を理解し人権を尊重しようという意識の高まりと少子高齢社会という状況のなかで、共生の視点が一層強く求められている。しかし、日本の人権教育の推進に関する取組は必ずしも進んでおらず、様々な事件等の報道も続いている。

(2)家政教育は、学習者自らの生活をくぐらせながら生活の営みと社会環境との関係を思考し、よりよい社会をつくる主体的な市民の育成を推進する役割を担っている。従って、人権・共生に関わる授業も「思いやり」のような心情的理解に留まらず、児童生徒が主体性をもち、多様な価値観と向きあえる機会をつくることができる。

(3)共生社会の実現をめざす教育のキーワードにユニバーサルデザイン(以下、UDとする)を据え、首都圏の中学校、高校、大学、小学校教員を対象に共生・人の多様性の視点を育む家庭科カリキュラム試案を実施したところ、課題が明らかになった。

2. 研究の目的

本研究は、児童生徒の多様性を理解し共生意識を育める教員をめざした、教員養成課程の学生の共生・人の多様性理解を深める家政教育カリキュラムの開発を目的とする。具体的には、大学生の生活意識、人権に関わる知識・意識の実態調査結果を踏まえ、国内外の「人権教育の理論」「個人の自立・支援」「多様性の尊重」などの内容を盛り込んだ授業実践を行い、学生の共生・人の多様性の理解を深め、教育現場で活かされるカリキュラム開発をする。

3. 研究の方法

教員養成課程の学生の共生・人の多様性の視点を育む家政教育カリキュラムの構築における基礎的研究を発展させ、以下のことを行った。

(1) 研究の柱

「共生・人の多様性」に関する実態調査(質問紙調査、事例検討)
実践的カリキュラム開発

(2) 研究の柱に沿った研究計画・方法の概要

基礎的研究において試行した大学生の UD 知識・意識調査の質問項目の再検討、及び質問紙調査を実施

ノルウェー視察研修から教育に活かせる要素を得るとともに、基礎的研究において試行した授業とカリキュラム試案を基に、教材開発及び授業を検討

頻発する自然災害において、避難所での災害関連死の多さと「共生・人の多様性」視点の欠如の関連を確認。減災授業を発展的授業として位置づける

(3) 共生・人の多様性理解を深める家政教育カリキュラムの構築

4. 研究成果

(1) 共生・人の多様性理解を深めるカリキュラムの開発にあたり、その先駆的取り組みをしている北欧諸国の学校教育を規定するカリキュラム、子ども・青年の育成視点の特徴、さらに、教育現場と市区町村や国との関係、NPO など民間団体とのつながりの有無を確認するために、ノルウェーの小・中学校、大学、共生社会の実現に取り組むさまざまな公的機関、民間団体への研究視

察を行った。とりわけ、オスロ市では政策の1つとして、移民への配慮も含めた多様性の視点から「誰もが教育を受ける権利がある」という民主主義思想のもと、学校関係者だけでなく、議員、産業界といった様々な職種の人々とともに連携・検討していることを確認することができた。

共生・人の多様性を担保する教育の実現のためには、教員を目指す学生の資質向上が求められるが、同時に、本研究がより多くの子どもの豊かな発達を保障できるものである必要性も捉えた。研修内容は、入手した資料等も含め紀要で報告した。

(2)教員養成課程の学生の共生・人の多様性の理解を深めるカリキュラムの構築に向け、実施した質問紙調査結果や海外調査内容を踏まえて基礎研究でのカリキュラム試案を基に教材開発及び授業を立案した。とりわけ、従来の人権教育に不足しがちな「子どもの多様性をできる限り保障する」視点を加えられるよう努めた。

共生・人の多様性への理解を深めるための『家庭科ユニバーサルデザイン学習手引書』は、実践研究を重ねる中で、教員をめざす学生、中学・高校生、現職教員、一般市民に活用できるものへと改訂することができた。本研究内容は紀要等で報告した。

(3)頻発する自然災害への対策として、共生・人の多様性視点の育成が避難所における災害関連死の減少につながる可能性に着目した。そこで、UD 授業の発展的授業として減災授業も検討した。なお、減災授業の構築に当たっては、筆者らの専門分野に加え、社会福祉学、特別支援教育、防災学等の研究者や、企業、非営利民間団体、行政機関の助言も取り入れた。

図1は、2019年に実施したUD・減災授業の実践研究における事前事後調査結果の一部である。調査対象者は、東北地方の高校3年生、四国地方の高校1年生、九州地方の2年生の計468名である。

実践結果から、すべての項目において1%水準で有意に数値が上昇していることが明らかになり、授業には一定の効果があったことが推察される。とりわけ、事後調査で平均値が3.5以上の(生徒の半数以上が学習目標について「とても当てはまる」と回答した)項目に注目すると、「1.UDという言葉を知っている」が3.78、「9.学校にもUDの考え方やUD製品が浸透してほしい」が3.71、「20.避難所デザインにUD視点は必要だ」が3.68、「15.避難所に行けば大丈夫・安心ではないことを知っている」と「19.高校生も避難所運営に携わる可能性がある」が3.65、「16.避難所に行っても受け入れられにくい人、受け入れられなかった人がいたことを知っている」が3.60、「17.災害関連死という言葉を知っている」が3.59、「4.LGBTについて知っている」が3.58、「13.UDは自分にとって必要なものである」が3.56、「10.地域によってUDの浸透・普及に差がある」が3.51と、20項目のうち10項目が該当することが明らかになった。

なかでも、項目1と13の結果から、高校生はUDの言葉を知り、それが高齢者や障がいのある人など特別な人のためのものではないと、おおそ捉えられていることが確認できた。項目15、16、17、19の結果からは、避難所生活や災害関連死への理解が高まったことが確認できた。加えて、項目9、10、20の結果から、生徒はUD学習を通して社会的視点が育ちつつあることが推察される。

さらに、事後調査のみ設定した項目をみると、「21.避難所デザイン(設計)は個人で考えるよりもグループワーク(作業)のほうがよいものができる」の平均値は3.73、「22.クラス全

体で様々なアイデアを共有することで、よりよい避難所がデザイン(設計)できる」の平均値は3.76であった。この数値は、「1.UDという言葉を知っている」の3.78に次ぐものであった。生徒はグループで選択したケースの人の配慮点を避難所デザインに活かす取り組みや、他のグループの発表を聞くことを通して異なる配慮点・アイデアを共有し、安心・安全な避難所とはどのようなものか理解を深められたことが推察される。

以上のように、学習者が視野を広げ、多様な人々の生活を想像・思考し、さりげない配慮のある避難所をデザインすることができたことは感想の記述内容からも確認でき、本授業が学習者の主権者意識を育てる契機になることも明らかになった。

減災授業カリキュラムが加わった『家庭科ユニバーサルデザイン学習手引書』とその研究結果は、地域生活研究所、地域安全学会、紀要等で報告した。

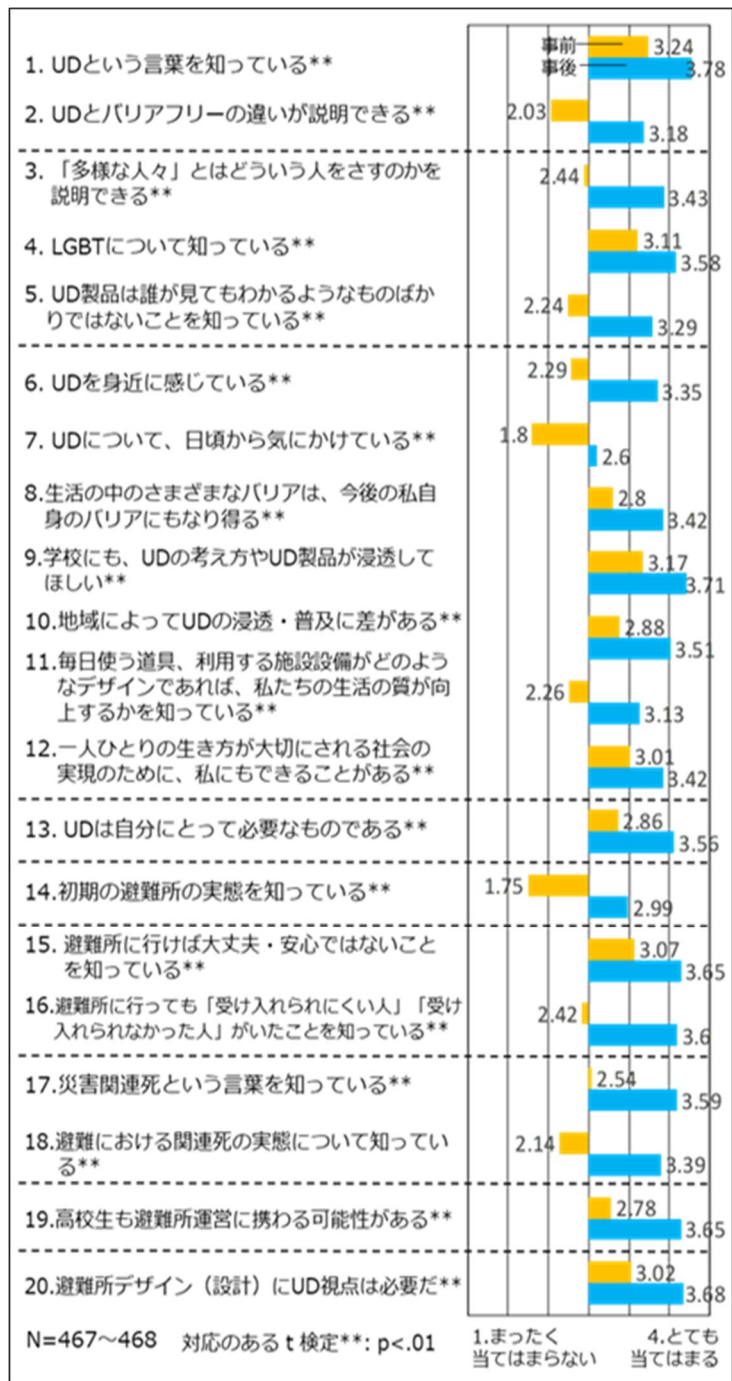


図1 UD・減災授業を通して得られた生徒の意識・理解度の変化

(4)すべての研究成果をまとめて出版することができた。出版物は大学教育現場に還元するとともに、盲学校も含めた中学・高等学校の家庭科教員へも配付することができた。さらに、成果報告は、日本家庭科教育学会関東支部会を通して発信することができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 富田道子	4. 巻 348号
2. 論文標題 家庭科における減災教育のこれまでとこれから	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 家庭科研究	6. 最初と最後の頁 12-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 富田道子,小谷教子	4. 巻 第6巻
2. 論文標題 高校生の減災学習を支える授業デザイン:教師に対するインタビュー調査によるリフレクションを手がかりとして	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 広島都市学園大学子ども教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 17-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 富田道子,小谷教子,石垣和恵,齋藤美保子,木村玲欧	4. 巻 36号
2. 論文標題 家庭科ユニバーサルデザイン学習を活かした減災教育プランの実践	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 地域安全学会 電子ジャーナル	6. 最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 富田道子,石垣和恵,齋藤美保子,小谷教子	4. 巻 第5巻第1号
2. 論文標題 教員養成系大学の家政教育における人権意識を高める授業デザイン:アセスメントのための指標に着目して	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 広島都市学園大学子ども教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 富田道子、小谷教子、松岡依里子	4. 巻 第4巻第1号
2. 論文標題 ノルウェーの学校教育とそれを支える共生社会：インタビュー調査を中心に	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 広島都市学園大学子ども教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 11-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18883/foce.0401.01	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小谷教子、松岡依里子、富田道子、良香織、石垣和恵、齋藤美保子	4. 巻 第31号
2. 論文標題 中学校、高等学校、大学の「共生・人の多様性理解」を促す学習についての実証的研究	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 敬愛大学国際研究	6. 最初と最後の頁 67-83
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件(うち招待講演 0件/うち国際学会 1件)

1. 発表者名 富田道子、小谷教子、石垣和恵、齋藤美保子、植田幸子、鈴木裕子
2. 発表標題 多様な人々のニーズに配慮できる減災教育プランと教材開発
3. 学会等名 防災教育チャレンジプラン活動報告会(東京大学地震研究所)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 富田道子、小谷教子、石垣和恵、齋藤美保子
2. 発表標題 高校家庭科における減災授業の実践：共生・人の多様性視点を活かして
3. 学会等名 日本家庭科教育学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 富田道子、石垣和恵、齋藤美保子、小谷教子
2. 発表標題 教員養成系大学の家政教育における人権意識を高める授業デザイン：アセスメントのための指標に着目して
3. 学会等名 日本家庭科教育学会第61回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 富田道子、小谷教子、石垣和恵、齋藤美保子
2. 発表標題 多様な人々のニーズに配慮できる減災教育プランと教材開発
3. 学会等名 内閣府防災教育チャレンジプラン活動報告会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Eriko MATSUOKA, Michiko TOMITA, Noriko KODANI, Kaori USHITORA, Kazue ISHIGAKI, Mihoko SAITO
2. 発表標題 An Examination of Education Practices to Promote Coexistence and Understanding of Human Diversity : From Perspective of Universal Design
3. 学会等名 Asian Regional Association for Home Economics Congress (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 富田道子
2. 発表標題 UD授業から減災授業へ：共生社会・持続可能な社会をめざして
3. 学会等名 日本家庭科教育学会関東地区会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 富田道子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 芽ばえ社	5. 総ページ数 12-17
3. 書名 家庭科研究「家庭科教育における減災教育のこれまでとこれから：持続可能な開発目標（SDGs）を追い風にして	

1. 著者名 富田道子, 石垣和恵, 小谷教子, 齋藤美保子, 石田晶子, 植田幸子, 鈴木裕子, 若月温美	4. 発行年 2020年
2. 出版社 一藝社	5. 総ページ数 103頁
3. 書名 UD授業から減災授業へー共生社会をめざした実践研究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>広島県大学共同リポジトリ http://harp.lib.hiroshima-u.ac.jp/hcu/ 広島都市学園大学子ども教育学部教員紹介 富田道子 http://hcu.ac.jp/subject/kyoin_pdf/c_tomita.pdf</p>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	松岡 依里子 (MATSUOKA Eriko) (10638125)	大阪成蹊短期大学・生活デザイン学科・准教授 (44413)	研究分担者を辞退。 2018年2月（削除）

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	良 香織 (USHITORA Kaori) (10459224)	宇都宮大学・教育学部・准教授 (12201)	研究分担者を辞退。 2018年6月（削除）
研究分担者	石垣 和恵 (ISHIGAKI Kazue) (20748941)	山形大学・地域教育文化学部・准教授 (11501)	
研究分担者	齋藤 美保子 (SAITO Mihoko) (20551708)	神戸女子大学・文学部・特任教授 (34511)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	小谷 教子 (KODANI Noriko)		非常勤講師ということで研究者番号を入手することができなかったが、本研究においては研究分担者レベルの役割を担ってくださった。

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関